

土木学会四国支部「土木紀行」No.40(高知県)

「須崎港港口地区防波堤」

2010年2月27日にチリ沖で発生したマグニチュード8.8の巨大地震で28日、北海道から沖縄の太平洋側各地に津波が到達した。気象庁は、須崎市の須崎港と岩手県の久慈港で1.2メートルの津波を観測した。須崎市の記録は1960年のチリ地震後、高知県で観測した津波としては最大である。南海地震ではさらに大きい津波が到達すると予想されており、高知県の重要港湾である須崎港の津波対策として、港湾地区に防波堤が整備されている。



写真1 須崎津波防波堤(西) 1)



写真2 須崎港の航空写真 1)

須崎港は土佐湾のほぼ中央、新莊川の河口がある須崎市に位置し、リアス式海岸の形状をした天然の良港として、古くから地域の生産、消費物資を取扱う港として重要な役割を果たしている。昭和36年のセメント工場の操業開始を契機に、工業港湾としての重要性が高まったため、昭和40年3月には重要港湾に指定され、現在では、主にセメント、石灰石の積出港として、高知県最大の貨物量を取り扱う貿易港となっている。

しかし、須崎港は天然の良港である反面、津波の被害を受けやすく、南海地震津波(昭和21年)、チリ地震津波(昭和35年)等、過去幾度となく大きな津波被害を受けている。そのため、昭和58年の港湾計画の改訂により、港湾事業と海岸事業の合併事業として、恒久津波対策となる湾口地区防波堤1420mが計画されている。また、高知港との整備工程の調整を図り、大型作業船の効率的利用(大阪湾等からの回航費削減)によりコスト削減を図っている。

表 1 須崎港の津波被害¹⁾

津波の名称	襲来日時	震源地	地震規模	須崎での死者	家屋被害
安政地震津波	1854. 12.24	紀伊半島沖	M8.4	50名	全壊 95戸 半壊 401戸 流出 550戸 浸水 151戸
昭和南海地震津波	1946.12.21	紀伊半島沖	M8.0	58名	全壊 198戸 半壊 563戸 流出 168戸 浸水 1315戸
チリ地震津波	1960.5.24	チリ沖	M8.5	0名	全壊 17戸 半壊 35戸 流出 2戸 浸水 936戸

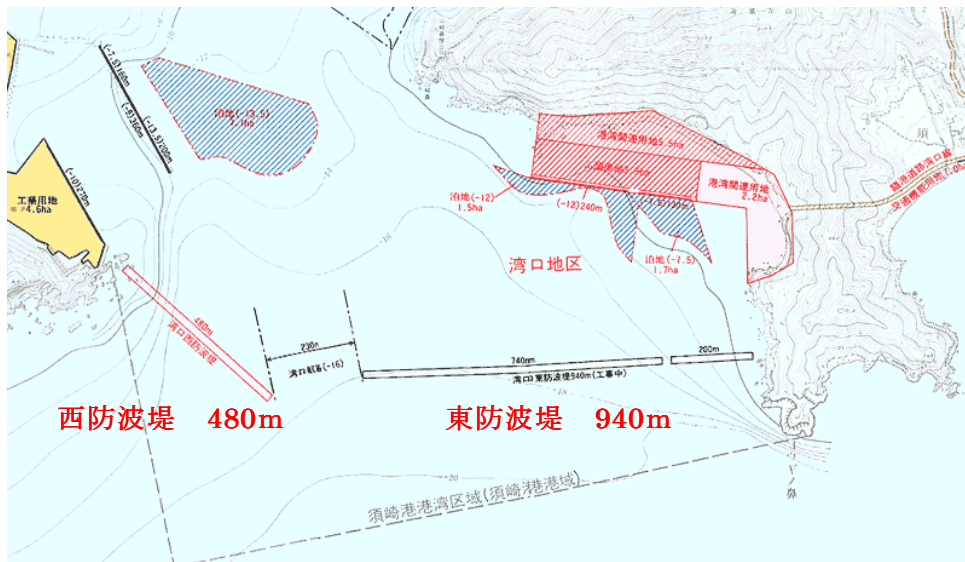


図 1 須崎港港湾計画図²⁾

防波堤の目的

- ・津波の被害から人命や財産を守り、地域住民の安全な生活ならびに背後企業の安定した活動を確保する。
- ・荒天時に船舶が安全に避泊できる水域を確保する。
- ・港内静穏度を確保し、岸壁等の荷役稼働率向上を図る。
- ・港内静穏度の向上による輸送コスト削減により、産業活動の安定・発展や、地域経済への効果が見込まれる。

参考文献

- 1) 国土交通省 四国地方整備局 高知港湾・空港整備事務所
- 2) 高知県庁 土木部 港湾・海岸課

(高知高専専攻科 建設工学専攻 2年 谷脇佑一)